中央亞細亞の文化

羽田亨著

本篇の著者羽田博士は去る昭和六年に各國人の西域探險に依つて獲られた新資料に基いて西域文明の沿革・特質を解說した「西域文明史概論」を世に送られ、洛陽の紙價を高からしめた事は周知の事であるが、之と類似の題名を持つ本篇の內容は、前者より廣範圍に亙つて居て幾分性質を異にする。卽ち此の冊子の半ばを費して古代より帖木兒帝國時代に至る中亞の史實の大勢が述べられ後半に於て種々の文化的事象が說明されてあり、壓縮されたる中央アジアの通史とも云ふべきものである。何れの歷史にあつても通史を書く事の困難なるは云ふ迄もないが、中央アジアの歷史にあつては、その內に地理・文化・人種の異つた樣々の區域を含み、且古來此の地方より起つた大きな政治的勢力とては唯帖木兒帝國が擧げられるのみで、其の歷史の大部分は周邊の諸勢力に依る支配の歷史であり、殊に東西文明の交流の舞臺としての此地方を考へる時、斯も複雜を極めた往古の中央アジアの諸樣相を概觀する事は決して容易でない。此の事は、本篇と相前後して出版された世界歷史大系「中央アジア史」が此地の歷史を周邊の諸勢力より觀察するといふ特殊な立場に依つて書かれてゐるのを見ると一層よく了解されると思ふ。此の意味で斯學の權威なる博士の手に成つた此の概說書を今持ち得た事は、我々の大きな喜びと言はねばならぬ。

扨本篇の內容に就て見るに、其の眼目たる後半部は、

「中央亞細亞と希臘文明」、「ソグド人と商業」、「ソグド語及び天山南路に行はれたる諸語」、「中亞に行はれた諸宗教とその典籍」、「宗教美術」、「中央亞細亞と漢文明」、「回鶻の西遷と西域文明」、「トルコ族と回教」、「帖木兒王朝とトルコ文明」の諸章より成る。大體博士が過去二十餘年間に、著書、雜誌、或は講義に於て發表された業績の精粹を集めたものとも見る可く、而も其等諸事象間の脈絡が說かれてあるので、中亞の人種問題(第二章)や言語問題(第十四章)に關する西歐學界の諸說の沿革の說明等と相俟つて、斯學の絕好の入門書であると言へる。Küsän の意義、ソグド人の活躍等、博士に依つて初めて解決がつけられ、或は研究の先鞭がつけられた諸說、其他博士年來の持論が述べられてゐる事は勿論であるが、從來未發表の說がある事も見逃せぬ。卽ち中央アジアのギリシヤ化(十二章)、或は支那化(十七章)の程度に對する見解の如き、西歐諸學者の所說と對比して博士の深き識見を窺ふ事が出來る。

憾むらくは本篇は帖木兒帝國時代を以て筆を斷たれてゐる事である。又、卷頭に地圖があつて、理解に便ではあるが、本講座の性質上圖版のない事は稍物足りない。それから慾を言へば、參考書目を擧げて頂いたならば、我々後進にとつて一層結構であつたと思ふ。

(藤枝　晃)